

5時やっとプラトーに降り着き、Y氏と3人でC.Iに向う。C.I着はたっぷり日の暮れた8時だった。

8月4日 馬でケロバルカへ買物に行く。広大なパンペ、背後の連山、すみきった湖、所々に現われるインディオのアドベ家、その中を馬でかける。胸のすぐ思いだ。ケロバルカはガラの悪い、ちょうど西部劇を想わせる鉱山の街だ。ビールとコカを求める。酒場はアドベ造りで馬で乗りつけるのにぴったりの店だ。往きは一軒づつインディオの家に立寄ったが、帰りはペニャの家に寄りごちそうになった。馬フンでココアを沸かし、パパ、鱈を腹いっぱいいただいた。日が暮れて、馬を急がせB.Cに戻る。

サンタローザ東峰(5578m)の初登頂と無事を祝ってささやかに乾杯する。

2. Mt. BACO(フィリピン)(1968年) 三浦嘉孝

1968年3月下旬より5月初めにかけ、探検部は第2次フィリピン・ミンドロ島へ調査隊を派遣し、その一環としてバコ山(2487m)の登頂と、その周辺に居住するバゴン族の調査を行なった。以下は島民がミステリアス・マウンテンと称し、非常に恐れているBACOの登頂記録である。

バスをチャーターして、ポンガポン河に入ったのは、4月11日のことであった。もうかれこれフィリピンに着いてから20日も過ぎている。バスは河を渡り、河原を進むが、ほどなく通行不能となり、そこで荷を下し、われわれに同行してくださるトトのお父さんトルデシラス氏を待つことにする。この方は政府の森林調査官として島をくまなく歩き廻り、ミンドロ島の生辞引といわれる人で、われわれに同行し、案内、通訳をしてくださることになっている。

3日目にトトのお父さんが息子のグリーン・セシルと一緒にきた。しかしポーターとなるマンギャンは2名しかいない。今はちょうど農作期で彼等も忙しいとのことで集められなかつたそである。これではとうてい動けそうにもないが、もうこれ以上こんな所に止っていられないのとてかくこの近

くの部落で集められるだけ集めてもらうことにする。どうにか12名は集まつたが、それでも1度に荷を運び切れないで2回に分けることにする。

4月15日、いよいよバコへの第1歩が始まる。月光で朝食をとっていると、ポーターがぞろぞろ集まってくる。荷を分配するのにかなり手間どり出発時間が遅れてしまった。これに限ったことではなく。フィリピン人はだいたいのん気で動作に移るのが遅い。熱帯地方特有の性格であろうか。だからこちらがいくら予定をたててもその通りに物事が運んだためしがない。最初はこちらもかなりイライラしたが、今ではもうすっかりフィリピンペースに慣れてしまっている。ポンガボン河に沿ってキャラバンが始まる。炎天下の河原歩きのキビシサときたらどうしようもない。ポーターは、パッキングケースを頭に乗せたり、肩でかついだり、木の皮でひもを作りそれで荷物をくくり、ひたいにかけたりして歩いている。よくこんなかっこうで歩けるものだと思うのだが、われわれよりずっと元気だ。

今日の行程はアタリアング川との合流点までとする。これから先は、川幅も幾分狭くなってきた。昼食後、先生、蓑島、トト達は残り、他の者は再び今きた道を引き返す。一日2往復する予定であったが、皆疲れているので出発を明朝にする。この暑さでは日本と同じように行動するのが無理なようである。

翌朝もポーター達は暗いうちから集まってきた。今日は14名集まっている。ポンガボン河は河幅が広く、昔の車道もところどころ残っている。途中から河原は草原となり気持ちがよい。それに今日は雲が多く直射日光があまり当らないので歩きよい。かなりよいペースでCⅡに着く。そこで昼食をとり、先を急ぐことにする。先生、松村は運べない荷物とここにもう一日泊まつてもらう。河は狭まり、水深も増し、腰までの渡渉を強いられる。しばらく行くと河は一変して渡渉困難になった。淵を高巻きしたところにテント場を見つけ、ここをCⅢとする。ポーターを今日中に先生達のいるCⅡまで下ろすつもりでいたが、今日の強行軍のた全然動いてくれない。仕方なく浅生、蓑島に下ってもらう。このあたりまで来ると夜はかなり冷えこんでくる。ボ

ーター達は木の葉で即席の家を作り夜露をしのいでいるようだ。

翌朝早くポーターを下らせ先へ偵察に行こうと思っていると、われわれが探していた、いわゆる文明化されていないマンギャンが姿を見せ、写真や8ミリの撮影におわれる。最初警戒しなかなか近づかなかったが、トトのお父さんの努力でいろいろ聞きただせるまでになった。午後先生達を迎えて行く。

今夜はCⅢに全隊員と全荷物が集結出来た。今まで働いてくれたポーター達もこれ以上奥に入るのはいやだと言うので、金を払い帰ってもらう。しかしその中のドクターと呼んでいるマンギャンの医者が最後までわれわれに同行したいと言う。バゴンの言葉を話すことができるのは彼だけなので大変助かる。

次の日2名が偵察に出、ドクターやトトのお父さんはポーターを確保するためマンギャンを一人一人くどいている。しかしそう多くは集まらず、荷はやはり二度に分けなくてはならない。

4月19日 トトのお父さんに残っていたとき出発。少し進むともう河というより沢と言った方がよいくらいぐっと狭く、険悪になってきた。まわりもジャングルの様相が深まり、沢はとうとう通行不能となった。しかたなく右岸を高巻く。マンギャンが先頭にたち、ボローで道を切り開いてくれる。急な斜面をトラバースし、つたにつかまり再び沢に下る。それよりしばらく逆登ると、巨大な岩の上にマンギャンがおおぜいいる。皆申し合せたようにパイプをくわえている。マッチを3、4ケわたすと喜んで木を切り倒し、小屋を造ってくれる。ここをCⅣとし ポーターにはもう一度引き返し残りの荷を取ってきてもらう。しかし全部運び切れず、その分はCⅢに残す。

4月20日 テント場より少し行ったところの左岸の小沢に入る。出合は滝となっている。沢は地図によるとただの小沢となっているが水量も多くりっぱな沢だ。その沢の源流近く、高度900mあたりから沢をはずれ巻きにかかる。いやなブッシュこぎが始まり全員ヒルに悩まされる。予定では、今

日中に C.V を設営することになっていたがどうやら無理のようだ。今日のテント場は、涸沢の最上部で少し空がのぞける。木を切り倒し、斜面にテントを張る台を作る。湿気もさけられ、快適な住居となる。

4月21日 朝マラリヤの予防薬キニーを飲み出発。すぐ巻きにかかる。ルートはあいだらじめじめしていくいやなところだが、昨日よりは少しよい。10時頃始めて視界が開け、バコ山からウッド山にのびている稜線が見えたが、バコ山のピークはまだ見えない。沢を2本、リッジを2本越え最後の沢に出たところで昼食、予定ではポンガポンの本流まで下ってから B.C. を設営することになっていたが、ここを B.C. とする。ここも平らなところはなくまたマンギャンに小屋とテントを張る台を作ってもらう。サンホセの町を発って13日目、やっと念願のベースキャンプが設営できた。

4月22日 バコアタックのため偵察に出る。マンギャンが道を切り開いて行ってくれる。テント場より、北へ北へと尾根を巻き 1900m 地点の稜線上に出る。木に登りバコへのルートを探るが、バコ山より西にのびているゆるい尾根がルートとしてもっともよさそうだ。夜ミーティングを開き、バコ登頂隊およびブクサンガ河下降隊をきめる。登頂隊は藤原、岩本、浅生、簗島、松村、三浦の6名とする。できることなら全員登頂と思ったが、日程上残念ではあったが先生にはベースに残ってもらうことにする。ブクサンガ下降の方は岩本、浅生、松村、三浦それにトトが同行する。残りのものは、往路と同じルートで下山することとする。B.C. よりバコ山まではうまく行けば2日で登れそうだ。ブクサンガの方は予備日を含め7日で下れそうだ。アタックにそなえ、明日は休養日とする。

いよいよアタックだ、B.C. よりすぐ尾根を巻き始める。あいかわらずのブッシュだがルートは下りぎみなので少しは歩きやすい。沢も2本越し、3本目にあらわれた大きな沢が最後の沢となる。ここで少し腹ごしらえをし、これからルートを考えると荷が少し重過ぎるので、ここに少し残し後で取

りに来ることにする。そこより尾根に取付く。最初は少し急なガレ場を 100 mほど登り、再びブッシュ帯に入る。急斜面を直登ぎみに登る。非常に苦しい登りだが、かなり高度がかせげる。急な登りが終ると平坦になりしばらく続く。このあたりはおよそ 1400 m 地点のようだ。この尾根上には、わりあいはっきりした踏跡があり歩きやすい。1600 m 地点と思われるところで昼食にするが、このあたりまでくると、じっとしていると冷えこんでくる。今日中にもっと前進したかったが下に残した荷を上げなくてはならないのでここに幕営することにする。例のごとくテントはマンギヤンたちが作ってくれた木の台の上に張る。

4月25日 夜半からの雨のためと、昨日のうちに荷を全部上げられなかつたので、朝もう一度取りに下らなければならなかつたので出発がかなり遅れる。テント場より少し登り、それから下りぎみに巻き最初登る予定だった尾根の左側の沢に出る。それより南の尾根に取付く。この尾根はピークから直接出ていてルートとしては最もよいように思われる。急な登りが一時間ほど続き、ぐっと高度をかせぐ。しかし、登っても登ってもいっこうに視界は開けず、正確な現在地の確認もむつかしい。1時半ごろどうやらピークが近づいてきたことを感じる。最後の胸がつかえそうな斜面を登り切ると平坦な場所に出た。頂上はブッシュにおおわれ、ガスが濃く、まったくくなにも見えない。記念写真を撮り、日の丸の旗をマンギヤンに一番高い木の上にかけでもらう。殺風景なジャングルの中で日の丸の赤がひときわ美しい。標高こそ 2500 m たらずの山であるが、おい茂り密林とそれに伴うルート選択にはかなりの困難さがあり、同時に少なからず探検的要素の見いだせる山であった。寒さにふるえながら頂上に 1 時間半ほどいたが、藤原、蓑島の 2 名を B.O. に下し、残り 4 名とトトはブタサンガ河を下降するため反対側に下る。

ミンドロ島は、バコ山を中心とし南北にのびる尾根により東側をオリエンタル、西側をキキシデンタルと呼ばれ、前者は雨が多く、山はすべてジャングルでなんとなく陰気なところであるが、後者はジャングルもなく、乾燥し

た草原地帯である。

バコ山頂より 30 分もすると、その特長がすぐあらわれた。ジャングルは終り、ガスもすっかり切れ視界がパッと開け、はるかかなたのサンホセへ続く山並が見わたせた。変化に富んだ山腹に傾きかかった陽があたり、草が黃金色に輝いている。久しぶりに太陽を受けわれわれは生返ったように走り下った。バコとその東側の無名のピークとのコルによい幕営地があったのでここにテントを張る。

4月26日 コルよりブクサンガ川までの下降は、無名ピークよりのびている尾根を下ることにし、トラバースぎみにその尾根に出、一気に下る。1時間半ほどで川に下り立ち、乾いた喉を久しぶりに充分潤す。川の下降は問題なさそうだが、油断はできない。5時間近く単調な川原歩きが続いたが、とうとう通過不能の廊下があらわれた。右岸の絶壁の上が比較的ゆるやかな草原地帯なのでそこを高巻くことにする。思ったとおり歩きやすくしめたと思ったが、こんどはなかなか下降ルートが見いだせない。行けども行けども絶壁は続いている。日没も近くなったので途中小沢に出会ったところで泊ることにする。テントも張る場所もないで各自それぞれ適当なところに横になる。

4月27日 出発してから1時間ほどで下降ルートが見つかり川に下る。1時間半ほど川づたいに行くと左手より大きな沢が合流している。そこよりわれわれはブクサンガ川よりはなれ尾根に取付くこととする。日数が少ないのでルートを川にとるより尾根にした方が確実である。尾根の取付は急なガレ場でいやらしい。強い太陽の光がたまらない。しかしこれが最後の登りで後は下りのみというので皆頑張るが、だらだらした登りはいつ果てるともなく続いている。非常な暑さといままでの疲れが一度に出てきたのかいっこうちにピッヂがあがらない。喉の乾きは激しいが水は少ししか持っていない。おまけに水場と思っていた沢は完全に干上がって一滴の水もない。そうなるとよ

けいに喉が乾いてくるものだ。とにかく水場を深すのが先決だ、重い足を引きづり前進するが、もう汗も出てこない。頭がボーとしてくる。やがて前方にいくぶん大きな沢らしきものが見えてきた。近づくと眼下に水が流れている。よろけるようにして下るがなかなか着かない。やっとの思いでたどり着くがしばらくはその場にすわりこんでしまった。あれほど飲みたいと思っていた水も、いざ目の前にあるとそれほどほしいとは思わなくなる。しかし一口飲みだすと後はきりがない。皆 3 ℥ ぐらいは飲んだだろう。予定では今日中にもっと進めるはずであったが、この調子では日中はとても歩けそうにない。今日はここで泊り、明朝は夜明け前に行動し、日の出前までに尾根に登り切ってしまうことにする。そうすれば明日中におそらく町へ下れるだろう。

4月28日 暗いうちに朝食をとりすぐ出発、テント場の前の急斜面を登る。陽が照らないので苦にならない。一時間で稜線上に出る。ここからは後にバコ山、ウッド山、前にはサンホセの町が見わたせる。ようやく陽がさし、朝日に輝く山々が美しい。稜線づたいのゆるやかな登りを、十分景色を楽しみながら行く。7時小ピークに着く。これで登りは終り後は下りだけだ。待ちに待った草原の下りに皆の足どりは軽く走るように飛ばす。やがて道らしきものも出てきて、9時頃牧場に着く。小さな小屋があったが人はいなかつた。太陽がだんだん強くなってくると同時に町も近づいてきた。

メンバー

横田健一 (文学部教授)

三浦嘉孝 (O. B.)

岩本琢磨 (工学部3回生)

藤原利幸 (文学部3回生)

浅生重捷 (工学部3回生)

簗島祐二 (経済学部2回生)

松村泰秀 (法学部1回生)